

2022年4月19日 全6頁

ルペン大統領誕生の可能性は皆無ではない

フランスが NATO を離脱して親ロシア派政権に？

ユーロウェイブ@欧州経済・金融市場 Vol. 193

ロンドンリサーチセンター シニアエコノミスト 菅野泰夫

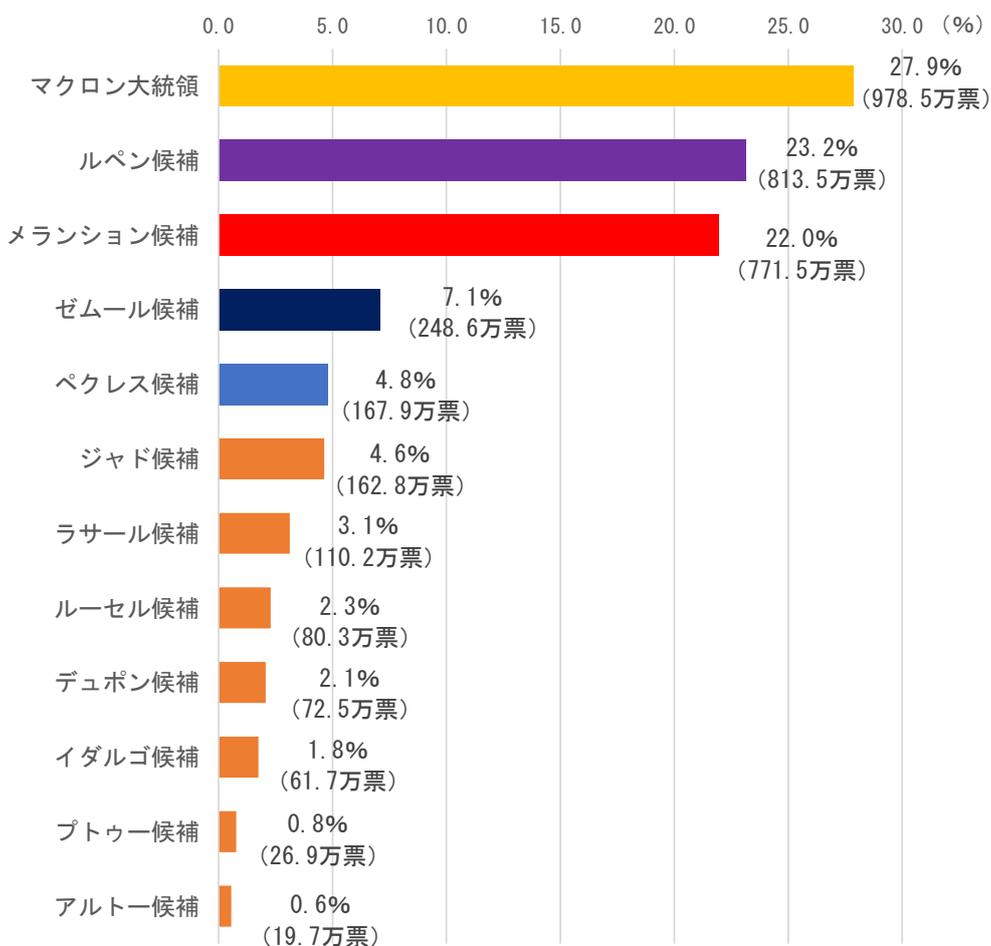
[要約]

- 4月10日に行われたフランス大統領選の第1回投票の結果、現職のマクロン大統領が27.9%の得票率で第一位、反 NATO、移民排斥を掲げる極右政党、国民連合のマリーヌ・ルペン党首が同23.2%で第二位となり、決選投票進出を決めた。決選投票がこの両者の対決となった場合には、マクロン大統領の勝利が世論調査で示唆されてきたが、直近の世論調査では大統領のリードは小さくなりつつあり、ルペン候補が終盤に支持率を伸ばしたことが、市場の動揺を招いている。
- 選挙戦の鍵を握るのが、大統領選挙で第三位となったメランション候補の支持者といわれている。ルペン候補は大胆に、極左のメランション候補支持者から多くの票を勝ち取ろうとしている。メランション候補は10日夜、支持者に対し決選投票でルペン候補には一票も与えるべきではないと訴えたが、世論調査からは支持者の一部はルペン候補に票を投じる可能性が示唆されている。
- 決選投票の行方は、4月20日に予定されている両候補のテレビ討論に大きく左右される可能性がある。ルペン候補は5年前の討論で振るわず、それが主な敗因となったと指摘されている。ルペン候補が大統領になれば、現在西側諸国が結束して発動している対ロシア制裁において大きな溝が生まれる可能性がある。4月24日以降にEUのリーダー国であるフランスが、反 NATO を掲げ、親ロシア派として生まれ変わる可能性は低いですが、皆無ではないことに十分留意する必要があるだろう。

マクロン大統領とルペン候補の決選投票

4月10日に行われたフランス大統領選の第1回投票の結果、現職のマクロン大統領が27.9%の得票率で第一位、反NATO、移民排斥を掲げる極右政党、国民連合のマリーヌ・ルペン党首が同23.2%で第二位となり、決選投票進出を決めた。前回2017年選挙時と同じ顔ぶれでの決選投票となった。後掲の図表3のようにこの両者での決戦投票ではマクロン大統領の勝利が確実視されていたものの、最新の世論調査では大統領のリードは小さくなりつつあり、ルペン候補が終盤に支持率を伸ばしたことが、市場の動揺を招いている。また過去数十年続いた左派と右派との二大政党制の終焉も鮮明となった。パリ市長で社会党のイダルゴ候補の得票率はわずかに2%、共和党のペクレス候補は4.8%と供託金没収の閾値となる5%を上回ることはできなかった。

図表1 フランス大統領選の第1回投票（4月10日）の結果



(出所) 仏内務省サイトより大和総研作成

第三位につけたのは、社会党や共和党のような伝統的な政党の候補ではなく、極左政党「不服従のフランス」党首で反NATOのメランション候補であった。メランション候補は前回同様、ルペン候補に迫る勢いを見せたが、あと一步で及ばなかった。またルペン候補の得票率は過去最高で、父であり国民連合の前身である国民戦線の党首を務めたジャンマリー・ルペン氏の記録も上回っている。一方現職候補は往々にして不利な立場にあるが、マクロン大統領が再選されれば、2002年のシラク大統領以来、20年振りの快挙となる。ルペン候補は2017年選挙時に掲げたEUおよび通貨ユーロから脱退という過激な公約を今回は控えたが、NATOの軍事部門からの離脱を政策に掲げ、自由貿易やシェンゲン協定には懐疑的な立場をとっている。EUはこれまでロシアのウクライナ侵攻に、厳格な制裁を課し、ロシア経済に打撃を与えるとの目的で協調して対応できているものの、万が一ルペン候補が勝利すれば、これが瓦解するおそれがある。

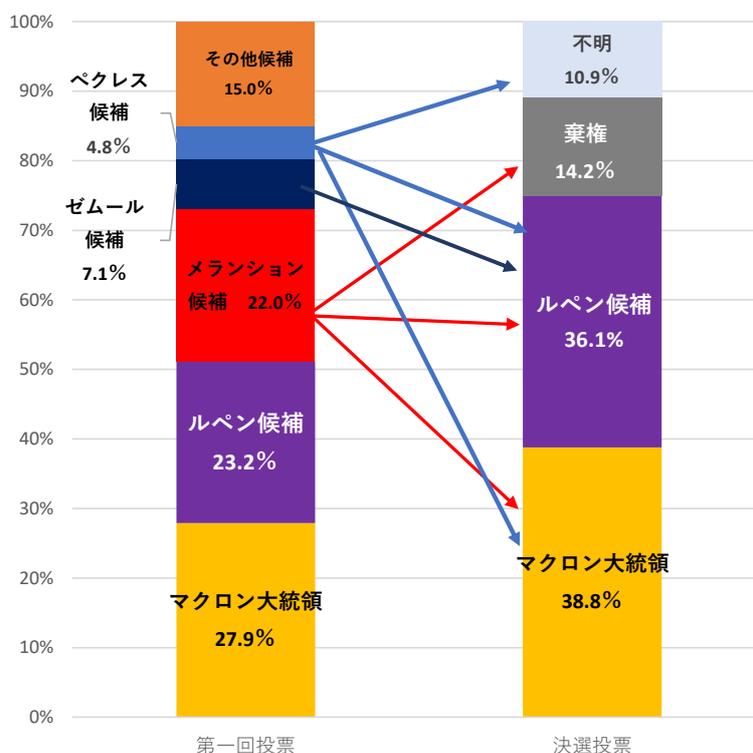
ルペン候補の勝利の鍵はメランション候補の支持者の動向

ルペン候補が勝利する可能性はマクロン大統領よりは低いものの、皆無ではないとみられている。これは、浮動票が相当存在するうえ、国内には政府に対してかなりの怒りが蓄積しているためという。コロナ危機やウクライナ戦争が起きる前は、マクロン大統領が心配するのは、燃料税の引上げに端を発し、マクロン政権の政策に抗議する黄色いベスト運動だった。この運動は、投資銀行出身のマクロン大統領の企業寄りな政策だけでなく、傲慢であり、上から目線であると有権者に受け止められたその個人的なスタイルに対する怒りによっても勢いづいた。ルペン候補は抜け目なく、庶民の生活により理解のある候補者としての立ち位置をとり、選挙運動中は生活費危機を主要争点にし、猫好きの親しみやすい候補として、排外的な極右政党党首からのイメージチェンジを図った。

なお、選挙戦の鍵を握るのが、大統領選挙で第三位となったメランション候補の支持者といわれている。ルペン候補は大胆にも、極左のメランション候補支持者から多くの票を勝ち取ろうとしている。メランション候補は10日夜、支持者に対し決選投票でルペン候補には一票も与えるべきではないと訴えたが、世論調査からは支持者の一部はルペン候補に票を投じる可能性が示唆されている。さらに、メランション候補が、マクロン大統領に投票するよう支持者に促さなかったことは留意すべきであろう。また、極左から極右への支持切替えは、実際にはそれほど突飛なことではない。フランス国内の斜陽化した元工業地帯では、特に顕著であり、今回の選挙戦で特に目立つ。ルペン候補の公約は、30歳未満への所得税免除や、年金支給額の引上げ、貧困層の退職年齢引き下げなどを含み、マクロン大統領を「金持ちのための大統領」と切り捨てる左派有権者にアピールする可能性がある。第1回投票日以降に行われたIfopの世論調査では、メランション候補の支持者のうち23%は、同候補の要請を無視し、ルペン候補に投票することが示唆されている。また同33%はマクロン大統領に投票し、44%は棄権するという。このため、両候補は決選投票まで、揺れ動く左派有権者の支持を勝ち取るための選挙運動を展開すると考えられる。

一方、当初はルペン候補の票田を大きく取り崩すとみられていた、反移民、反ムスリムのゼムール候補は、7%そこそこの得票率に留まり、第一回投票で敗退した。同候補は、ルペン候補とは意見の一致しない分野もあるものの、選挙運動中に、フランスのアイデンティティや安全保障、移民について何も意見を示さなかったマクロン大統領では話にならないと、ルペン候補に票を投じるよう、支持者に呼びかけている。ただし、ゼムール候補支持者がすべてルペン候補支持に回ったとしても、ルペン候補の得票率は30%に留まり、ここから過半数に達するまでが最も難しいところといわれている。得票率4.8%と悲惨な結果に終わった、中道右派の共和党ペクレス候補の支持者から一部票が流れる可能性もある。ペクレス候補は、支持者に対しマクロン候補支持に回るよう呼びかけている。しかし、世論調査からはそれに従う有権者は3分の1に留まり、3分の1はルペン候補に回ることが示唆されている。

図表2 フランス大統領選の決選投票の票の移動予想



(出所) Ifop より大和総研作成

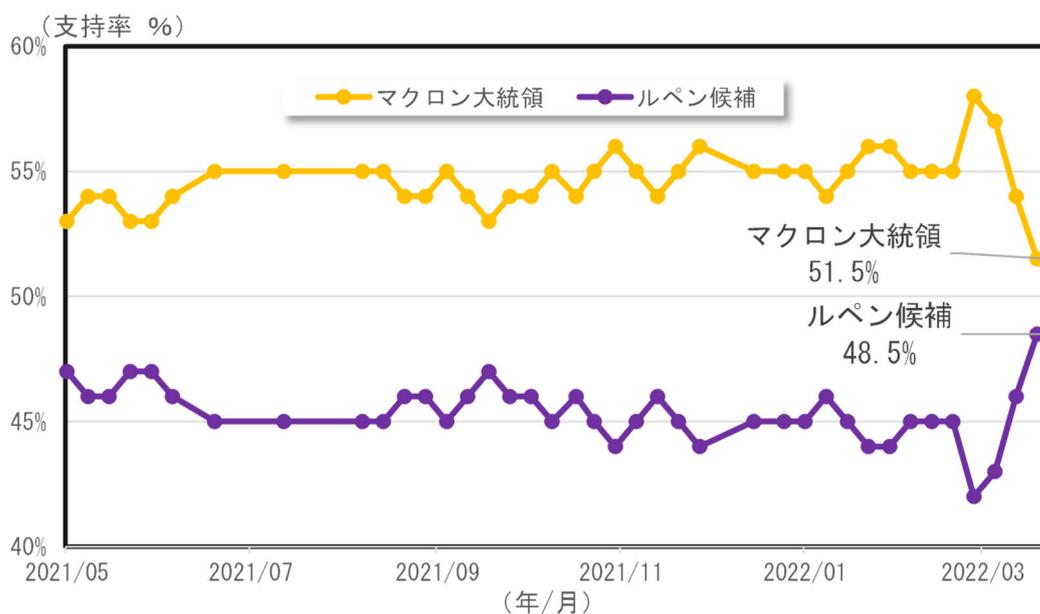
フランスに親ロシア派政権が誕生する可能性も

ルペン陣営は、国内の不満ムードにつけこみ、また左派有権者が往々にしてマクロン大統領に不満を持ち、嫌っていることも利用し、なんとかルペン候補が過半数の支持を得られるよう策を練っている。直近の世論調査ではルペン候補が48.5%、マクロン大統領が51.5%と、2017年選挙時よりも拮抗した数値となっている。一方、マクロン大統領も第一回投票翌日にルペン候補のおひぎ元である北東部での選挙運動をし、再選に向け最後まで戦い抜く決意を見せてい

る。マクロン大統領は再選されれば、改革を継続させ、ウクライナ侵攻を巡りロシアと対立しているEUおよび同盟国の中心となっているフランスのリベラルな国際主義政策を続けていくと主張している。

図表3 過去の大統領選の得票率とルペン候補とマクロン大統領の支持率推移

	投票率		決選投票の得票率
	第一回投票	決選投票	
2022年	73.7%	-	マクロン候補 (-) vs マリーヌ・ルペン候補 (-)
2017年	77.8%	74.8%	マクロン候補 (65.9%) vs マリーヌ・ルペン候補 (34.1%)
2012年	79.5%	80.4%	オランド候補 (51.6%) vs サルコジ候補 (48.4%)
2007年	83.8%	84.0%	サルコジ候補 (53.1%) vs ロワイヤル候補 (46.9%)
2002年	79.7%	71.6%	シラク候補 (82.2%) vs ジャンマリー・ルペン候補 (17.8%)



(出所) ハリス・インタラクティブより大和総研作成

伝統的な右派對左派の構図は、前回の2017年の大統領選でマクロン大統領が右でも左でもない中道派色を前面にして当選したことで、既に揺らぎつつあった。今回の共和党と社会党候補の惨憺たる結果は、フランス政界の激変を物語っているといえる。左派と右派の対立に代わり、マクロン大統領を筆頭とするリベラルや国際主義者と、ルペン候補に代表されるポピュリストや国家主義者との対立という構図になっている。フランスに限らず、近年はポピュリストや国家主義者の台頭が目立ち、ブレグジットやトランプ大統領の誕生などが好例となる。強権主義的な指導者の誕生といえ、ロシアのプーチン大統領やハンガリーのオルバン首相だろう。

決選投票の行方は、4月20日に予定されている両候補のテレビ討論に大きく左右される可能性がある。ルペン候補は5年前の討論で振るわず、それが主な敗因となったと指摘されている。ルペン候補の支持者は、今回は準備万端のルペン候補が優れた議論を展開し、驚きの勝利をつかむことになる主張している。また、マクロン大統領が傲慢であると攻撃していけば、ゼム

ール候補の票や、共和党の右派陣営の票を取り込めるとみている。

ルペン候補が大統領になれば、現在西側諸国が結束して発動している対ロシア制裁において大きな溝が生まれる可能性がある。

一方、マクロン大統領はこれ以上、右派有権者からの票を期待することができない。メラニョン候補支持者からどれだけの票が獲得できるかが、再選の鍵を握ることとなる。4月24日以降にEUのリーダー国であるフランスが、反NATOを掲げ、親ロシア派として生まれ変わる可能性は低いですが、皆無ではないことに十分留意する必要があるだろう。

(了)